

唐招提寺所蔵「一字結縁法華經」・「傳法灌頂作法」について

歴史研究室

昭和29・35・36年度の総合調査の継続として37年度も古文書經典の調査を行った。調査点数は約800点に上るが、その中から特に右に掲げた2点を選んで紹介したい。

I 一字結縁法華經(序品の内)

1巻

紙本墨書 卷子本 楮紙 墨野(10段に分つ) 表紙欠 検割軸  
縦27・3cm 一紙長52・8cm(25行) 紙数11紙 263行(366字)  
界高24・3cm 界巾2.1cm 一段界高2.4cm

1行を10段に分ち、1段毎に經文と人名等を交互に記している。本書には表紙は無く、内題、奥題共に書かれていないが、その文を検するに法華經序品の一部である。即ち初行は「<sup>可</sup>衆心以是」、末行は「随出家苑大」で、序品をほぼ3分した真中の部分に当っている。序品の首尾は共に欠けているが、巻首にはもとの表紙かと思われる白紙の断片が残っていること、末尾には軸付部として1行分の余白があることから考えると、本書はもとからこのままで1巻とされていたものと推定される。1行5字詰という形をとつたため、序品全部を1巻に収めるとかなり大部なものとなる。そこでそれを3分して3巻とし、本巻はその2巻目に当るものであろう。法華經8巻(28品)の中で現存するのはこの1巻のみであるが、この割合で考えれば全部で数十巻の

多きに上つたものと思われる。

第1字目の下段には「<sup>弘源和上</sup>とあるが、弘源和上は享徳3年(1332)12月10日先師任宗和尚示寂の後をうけて唐招提寺第50世長老となつた。<sup>(1)</sup>歿年は明かでないが、第53世良恵和尚が長老となつたのは文明13年(1471)であるから、弘源和上の長老在職期間は150年代からせいぜい60年代にかけてであろう。したがって本書の書写年代もほぼ150年代前後頃と考えられる。

弘源和上に続いては、1字毎に「性榮禪門」「明幸大姉」以下の人名や「法界」「二親」「チ、」「ハ、」「法界衆生」「七世四恩法界衆生平等」「一家一門」等々が書かれている。中には「九郎逆修」「為念阿了阿」の如き書方も見られる。こうしたことから考えると、これらの人名等はこの法華經供養に結縁し、もしくは結縁せしめんとした人々の名前と考えられる。1人の名が1字のみでなく数字以上にわたつて見えている場合も少なく、更に又その父母一族等のために結縁している例も少くない。1人で数字にわたる場合、必ずしもその名が続いて現れるのではなく、かなり前後している例が多い。したがって単に「法界」とある場合それが誰によるものかは明かにしえないので、正確に誰が何字という数を出すことは出来ない。

でも正確な値を出し難いが、当時の東寺下行斗1石の値はほぼ1貫文を前後するところである。とすれば法華経全部で米約70石となるが、庄園からの年貢は室町時代以降減少しつつあり、寺にとつて70石の臨時収入は極めて大きな意味を持つている。1字1文であつたか否かは明かでないが、例えそれを半分としてもこの一字結縁法華経を手段と

「一字結縁法華経」「傳法灌頂作法」について

第1図 一字結縁法華経(巻首)

本巻の字数は1365字であるが、1字毎に何がしかの寄進を仰いだとしてもかなりの額に上る。法華経の全文数は題号も含めて6892字であり、かに1字1文と仮定すれば89貫文となる。当時は樹の相違が甚しいので米に換算しようとし

して集められた浄財が莫大な額に上つたことは言うまでもない。これが何の用途に宛てられたかは明かでないが、伽藍の修理等にあてられたのであろうか。

勧進の方法としては仏像の胎内納入文書等に種々の例が見られるが、このように経文1字毎に結縁者の名前を記した例は極めて珍しく、貴重な資料といふことが出来る。

なお今1巻これに類すると見られる法華経譬喩品の一部が存在している。これは「以此譬喩説一仏」より「是菩薩若人小智」までの30行で、1行を7段に分ち、1段毎に1字を記しているが、各字の下にはかなりの空白がある。巻首には前と同じく白紙の断片が残っており、巻首には欠伏はないものと見られる。本巻の紙数は6紙であるが、墨付は僅に1紙半で、それ以下は墨野は引かれているが経文は全く記されていない。各字の下之余白には何も記されていないが、前と同じく結縁者の名を記すためのものではなからうか。本巻もまた結縁者を記す為に経文を書写し始められたが、何等かの理由によつて中絶され、そのまま放置されたのがたまたま残つたものであろう。

## 註

(1) 招提千歳伝記卷上之

伝律篇

(2) 註(1)参照

## II 傳法灌頂作法

1巻

紙本墨書 卷子本 楮紙 墨書裏書・返点・送仮名 縦15・8  
cm 紙数34枚

本書は室生寺において行われた伝法灌頂の次第を記したもので、そ

の内容は「三昧耶戒道場事」「堂達作法」「還烈事」「鎮守読経事」  
 「乾元二年<sup>歳次癸卯</sup>室生寺庭儀伝法水丁被行図」「文保元年<sup>歳次丁巳</sup>於室生寺庭  
 儀伝法丁被行図位」その他に分れている。巻末は勿論文中にも2ヶ所  
 の写本奥書があるが、それらを掲げると次の如くである。

(堂達作法写本奥書)

乾元二年<sup>癸卯</sup>六月廿一日於室生寺被行伝法」訂時作法也是偏勝鬘院之  
 様也云々受者」八幡善法寺道智房 職衆十二口」大阿闍梨御年七十二  
 也云々」為備後日癯亡私注之定辭事相交欵」後見可被直之耳

真海

(文保元年庭儀伝法灌頂図写本奥書)

右指図者文保元年<sup>丁巳</sup>一月廿八日於室生寺」灌頂堂庭儀水丁被行之職  
 衆十六口也」大阿闍梨空智上人<sup>忍第</sup>御年八十六歳也」受者河州西林寺  
 之僧欣聖房凡此法会」之儀式厳重殊勝者也耳

真海

(巻末奥書)

右自乾元之図以下雖為別之散在之物」法海統集之誠法流之眼目当山  
 之重」宝不可過之曾不可出室内聊尔不可披見」之所願密教之弘通所  
 望竜花之相統也矣

文安二年<sup>壬辰</sup>十二月六日

室生寺住持沙門法海<sup>三十七  
在判  
八夏</sup>

于時享徳三年<sup>歳次甲戌</sup>十月廿八日於室生寺」法海大徳自御方賜此記録蒙許  
 可書」写早仍翌日七写之畢

求法金剛乘仏子湛恵

祐筆

于時寛正七<sup>丙戌</sup>二月日於靈山院中坊筆馳乎」雖尔因叵乖湛恵阿闍梨所  
 望不顧惡筆如形書」写矣白麻雖鮮腐毫疎斯也仍於在披見次者」可預  
 五字明者也

右筆比丘聖琳<sup>生年  
廿九</sup>

右の奥書によれば、乾元 文保の頃真海が記した室生寺における伝  
 法灌頂の記録が種々あつたが、これを室生寺僧法海が文安2年(一一二二)  
 集めて現在の如き1巻としたものである。それを享徳3年(一一三三)湛恵  
 が書写し、更に寛正7年(一一三六)聖琳がこれを写したのが本書である。

この奥書に見える真海・法海以下の人々については詳しいことは不明  
 であり、おつてまた検討を加えたい。

本書には室生寺の薬師堂・弥勒堂・灌頂堂の指図が掲げられてい  
 る。乾元2年図(口絵) 文保元年図(挿図3)共に薬師堂と弥勒堂とは  
 隣り合つて書かれている。現在の金堂はかつて薬師堂と呼ばれていた  
 ことは既に論ぜられているが、この両堂の位置によつてもそれは更に  
 一層明確にされる。本文ならびに乾元2年図・職衆座図(挿図2)によ  
 れば、薬師堂には礼堂が付けられていたことが知られる。現在の礼堂  
 は江戸時代のものと言われるが、それが付加えられたのは江戸時代よ  
 りも古く、鎌倉時代もしくはそれ以前である。なお現在の礼堂は1間  
 であるが、職衆座図によれば3間の如くである。現在の礼堂には東西  
 に妻戸があり、その柱がその間に立てられている。職衆座図にも妻戸  
 の記載があり、その柱が記されたため3間の如くになったものであろ  
 うか。又乾元2年図・文保元年図共に正副に階段が記されている。現

2年図には「其後弥勒堂被修理之刻被成東向早」とあり、鎌倉時代末期頃には南面していたが、後の修理で現在の如く東向に変更されたことが知られる。その時期は明記されていないが、乾元2年(一一三三)以後で、遅くとも本書が書写された寛正7年(一一三六)以前である。現在の堂

「一字結縁法華経」・「傳法灌頂作法」について

第2図 傳法灌頂作法(職衆座図)

在は正面に階段はないが、古くはここに階段が設けられていたのであろう。弥勒堂については正面の間数は不明であるが、奥行は乾元2年図3間、文保元年図4間となつてゐる。現在の弥勒堂は3間3面であるが、この図と異り東面している。乾元

は3間3面であるが、もと南面していたのが東向に変えられたとすれば、乾元2年図の奥行3間の方が正しいと考えられる。

灌頂堂については職衆座図に簡略な指

図があるのみである。これによれば間口5間で奥行は不明である。現在の灌頂堂は鎌倉時代のもので、この図は当然現在の建物のものである。図には奥行2間の外陣が記されているが、これは現状と同じで、特に問題にする点もなさそうである。

以上指図についてのみ簡単に述べたが、本文については省略する。室生寺については文献資料は少く、その歴史を考える上で大きな障碍となつてゐる。本書によつてその一部でも明かにしうれはと思つてここに紹介した次第である。

(田中 稔)

第3図 傳法灌頂作法(文保元年図)